STORY 01

「本当に出来るんですね？」という言葉に覚悟を決めた日

――セブン―イレブン札幌八軒一条東1丁目店 オーナー○川越純隆さん マネージャー○川越啓子さん

佐々木聖・文 text：Sasaki Kiyoshi
樋口彦四郎・写真 photo：Higuchi Hikoshiro

働ける場所が欲しい 妻は夫の背中を押した

故郷の宮崎県宮崎市へ帰る1週間前。北海道恵庭市で約35年間勤めた自衛隊を定年退官した川越純隆さんに一本の電話が入った。「札幌に出店計画があります」。株式会社セブン―イレブン・ジャパンのオーナー募集担当、山本泰さんからだった。

純隆さんはヘルパーの資格を取り、故郷の施設で働くことに決めていた。「父親が認知症でその施設の世話になり、恩返しの意味もありました」。しかし同郷の妻・啓子さんは「今さら宮崎では暮らせない」と北海道に残るつもりだった。啓子さんの叔父は脱サラしてセブン―イレブンのオーナーをしていた。夫婦で働ける仕事として純隆さんはそれも定年後の選択肢に入れ、現職時にオーナー募集の説明会に出席していたのだ。時ならぬセブン―イレブンからの打診で人生の大きな岐路に立ち、新たな決断を迫られた。

「ヘルパーの給料では仕送りもままならないし、専業主婦だった50歳過ぎの妻がこれから仕事を探すのも難しい」。せっかくの好機を見逃す手はないと、純隆さんは独立に踏み切ることにした。宮崎の施設には足を運んで丁重に事情を説明し、納得してもらった。

コンビニエンスストアのオーナー志望者の大半に立ちはだかる最大の障壁が「家族の理解」だという。だが川越夫妻の場合、むしろ啓子さんのほうが提案し、勧めた。「自分の働ける場所、居場所が欲しかった。それで思いついたのがセブン―イレブンでした」。ホテルマンだった叔父は転職してセブン―イレブンのオーナーを15年間全うした。それが夫の背中を押した理由の一つだ。ホームページで元自衛官のオーナーが紹介されていたことも、「きっとできるはず」と安心材料になった。

初めての接客業に戸惑うが 自衛隊の経験が生きることも

「本当に出来るんですね？」

純隆さんはオーナーになる決断をしたとき、山本さんに念を押されたことを忘れない。そのときは「なんとかなる」と思った。だが、ほどなくその真意が身にしみる。「国を防衛する訓練の仕事と小売業はまるで違う。頭ではわかっているつもりでしたが、オーナー研修の段階から不安の連続でした」

最初のうちは緊張のあまりレジを打つ手が震えた。宅配便の受付や公共料金の収納業務など商品の販売以外にも対応すべき接客業務は多い。自分では声を張っているつもりでも「いらっしゃいませ」が小さい。オープン前は商圏にチラシを4000枚以上配り「8キロ痩せました」。

もちろん啓子さんも接客業は初めてだ。平成26年8月に開店した直後のてんてこ舞いは甘い予想を遥かに超えていた。

だが、純隆さんの自衛隊時代の経験が財産になってハードな仕事も乗り越えられた。数日間不眠不休で道路を修繕したり指揮所を築くなどの長年の訓練で培った体力と精神力がものをいった。従業員との接し方も、部下の信頼が厚かった純隆さんの自衛隊での経験が生きた。「何ごともメリハリが大切でやるときはやる。休むときは休む。仕事を始める前の気持ちの切り替えは基本中の基本」という自衛官時代の方針は今も貫いている。

シフトの交代ごとに必ず朝礼を実施し、「いらっしゃいませ」に始まり「またお越しくださいませ」に終わる。「自衛隊では歳上の部下もいましたから、口のきき方には配慮が必要でした。従業員に対しても、頭ごなしではなく遠回しに注意を促し、褒めて育てるようにしています」

啓子さんは「気のおけない友人としか付き合ってこなかったので、私はつい従業員さんに対してきつい口調になってしまうんです。もっと相手のことを考えて話せ、とよく指摘されました」と振り返る。

自衛官時代の経歴

年月日	記　事
昭和53年4月4日	第113教育大隊に教育入隊（鹿児島：国分市）
昭和53年6月21日	第1施設群に教育入隊（恵庭市）
昭和53年9月18日	第334施設中隊に配属（ドーザ操縦手）:恵庭
昭和63年3月16日	第303ダンプ車両中隊勤務：恵庭
平成元年8月1日	南恵庭駐屯地業務隊に勤務（輸送班）：恵庭
平成7年3月23日	第334施設中隊に配属（車両記録係）：恵庭
平成7年7月1日	第334施設中隊（機材班長）：恵庭
平成12年3月28日	第101施設直接支援大隊第1直接支援中隊勤務（訓練陸曹）：恵庭
平成16年3月23日	第101施設直接支援大隊第2直接支援中隊勤務（訓練陸曹）：岩見沢
平成20年3月26日	第101施設直接支援大隊整備中隊勤務（訓練陸曹：庶務陸曹）：恵庭
平成26年2月13日	定年退職